

利用してもらいうか。その点から考えながら、この雑誌の形態を生かしてもらいたいです。

池谷 実際僕も、野村さんの改革の場に一緒にいたんです。二〇〇四年は改革をやろうとしたけれど、販売がうまくいかず、どこかでブレークがかかった。

野村 それは制度や組織が時代の変化のスピードと変わなくなっているからでしょう。その後、一年ごとに体制が変わっているのもやむをえない。むしろそのほうがいいのかなという気もしますよ。

池谷 世のなかや民博 자체の、いろんな状況が変わったことが『月刊みんぱく』と非常に深く結びついていますね。

石毛 それは制度や組織が時代の変化のスピードと変わなくなっているからでしょう。その後、一年ごとに体制が変わっているのもやむをえない。むしろそのほうがいいのかなという気もしますよ。

研究者主体で作る意義

石毛 「月刊みんぱく」がある限り、きちんと続けてほしいのは、やはり研究者の主体性で作るんだということです。お金さえあつたらプロの編集者に任せ、その人たちが読者に受けそうな企画を立ててということになる。だけど、そうなつたら民博で出している意味はなくなるわけで、編集に関しては、研究者たちが主体的にかかわって続けていくようにしてほしい。

池谷 「月刊みんぱく」へのもつとも大きな期待は、やはり続けてほしいということでしょうか。

石毛 そうですね。継続こそ力なりです。

野村 広い意味では、社会教育をになう研究博物館のためになるようがんばってほしい。

池谷 博学連携ですね。継続こそ力なりです。

野村 今、僕は大学で講義をしているけれど、教育への要求がものすごく厳しくなっています。それを考へる

と、民博が出す社会教育のメディアに対しても、要求とか、条件がすぐきつくなっているのも当然かと思う。

それにどうしたと先に行くか。そこだと思うんですけど、やめるのは、今以上のものができるときでしょう。

池谷 そういう意味では、まだ答えない状況が続くと思うのですけれど、石毛先生、最初のスタートのと

ころにどうしたと先に行くか。そこだと思うんですけど、やめたのは、今以上のものができるときでしょう。

石毛 なかつたものを継続するとのほうが、じつは大変なんですが、もう少しこうしたかつたというのはありますか。

池谷 野村先生は時代のいちばんの節目で改革をされ、難しさもよくわかつていらっしゃると思います。そのためにこの雑誌に対する愛情も非常にもつておられる感じがしますが、もう少しこうしたかつたというのはありますか。

野村 それは、一言でいえばもっと多くの人に読んでもらいたい、そして、書き手も満足できる雑誌にしたかった、というのがあります。それができたらしいんじやないかなと、今も思っていますけどね。この雑誌は民博のいわば社会的な顔の役割を果たしてきたわけです。民博の全国の会員へは毎月届くわけです。民博からの発信といふか、メッセージのいちばんの基本になつていて。そのことは今もいえると思います。

池谷 今回伺った話は全部、現在につながつているんですね。この雑誌の歴史をふりかえり、変わる部分と変わらない部分とがあつたことがよくわかりました。難しいことだけれども、時代に合つたものを出していかなければならぬと、非常に責任を感じます。

今日は短い時間で、約三〇年という長い時間をまとめお話しいただきましてありがとうございました。



『月刊みんぱく』歴代編集長からのメッセージ

日本の博物館の指針として

あのころの民博には尋常ならぬ熱気があった。わたしが入ったのは一九七六年一〇月、研究部はまだ三〇人くらいいたが、開館準備の仕事が山積みだった。それでも全員が気にせず、外見では(ら)くらくなっていたのは民族学積年の夢だった博物館ができるといつ想いをもつっていたからだろう。そんななかにあつても、民博は研究が優先、論文を書くことが基本方針だった。学問の純粋培養場であるアーリカの大学から帰つたばかりのわたしには、それは当然のことと聞こえた。

ところが、とつぜん広報のラインが浮上してきた。委員会が作られ、よくある年二回の「博物館ニュース」にする決めた。しかし館長室から、「ミニ」(ミニ)誌ではない、広報誌である」とつきかえされてしまう。結局、編集事務を民族学振興会の千里事務局(千里文化財団の前身)が受けもち、委員を研究部、管理部から選び、石毛直道さんを編集長として、表紙カラ一、紙面二色、二四ページの『月刊みんぱく』ができた。一九七年一〇月発行が第一号である。わた

しも委員にされ(抵抗したのだが)、そのうえ、一代目編集長となる羽目になってしまった。それが今も大きく影響していると思う。

今、日本の博物館は氷河期にあるといわれている。入場者が減少し、地方博物館のなかには廃館に追い込まれるものがさえ出ている。予算不足が響いているのは明かなのが最大の原因は、博物館が自己完結した世界に閉じこもり、市民の知的 requirement に応えていないからだ

と思う。この状態は民博にも当てはまるのではないか? 民族学と博物館をあわせ称しているために、アカデミックの世界に逃げ込んでいいだろか?

今、欧米の博物館は、停滞から脱して、上昇機運にあるという。展示法や、アクセシビリティなどの観客サービスに力を入れ、とくに広報の充実がめざましい。その点で、『月刊みんぱく』がわかるやすく、おもしろく民族学を市民に届けていることは、民博ばかりでなく、日本の博物館の指針となるものとして期待していいと思う。

継続は価値

わたしは『月刊みんぱく』が発行されてきた三〇年の内二六年を民博で過ごしてきたのだが、そのあいだ『月刊みんぱく』にはなぜか縁がなく、関係したのは最後の二年だけである。といつても最初の一年は単に手習い塾のコーナーを担当しただけで、編集に何のかかわりもなかつた。だから編集ということを何も知らない編集長を引き受けてしまつたことになる。それは、『月刊みんぱく』が存続の危機に陥つていたからである。そこ

でもう一度原点に返つて考えることにして、継続できることには継続して、残りは見直すこととした。

民博は研究所である。だから研究のおもしろさを伝えることこそ、『月刊みんぱく』の使命であろう。幸い民族学というのは、人間にかかわるすべてを扱い、しかも世界の民族を対象にするのであるから、種は尽きない。いろいろな切り方がある。我々はそれを「呪う」とか「産む」といった動詞を用いて切りとることにして、特集を組んだ。しかし博物館をもつて

いるのだから、特展や博学連携の特集を組んだり、各地の博物館にかかる人に話題を提供してもらおうコ

ーナーも設けることにした。また民博は大学共同利用機関であるとともに、大学をもつてているので、全国の民族学研究者にできるだけ執筆者として参加してもらい、調査から帰つた大学院の学生の新鮮なデータも提供できるように心がけて編集をおこなつた。

卷頭エッセイは「世界へ世界から」としたが、それは、民博が世界の諸民族の資料の集積地であるとともに、その研究の発信地であり、世界のこ

とを、そして日本のことを考える場所であることを象徴させている。月刊誌は他の機関が出していくないし、三〇年も続けてきたからもうやめようではなく、他では出せないものであるから、もつと続けていこうといふのが、悠久のむかしから未来へと

杉田繁治

(すぎたしげはる)
龍谷大学教授
本館名誉教授

役割と表現様式の再考を

『月刊みんぱく』第三〇巻まで到着おめでとうございます。わたしは三代目の編集長を務めましたが初期のころは楽でした。初代が全体の枠組を決めておかれたので、わたしはそれを踏襲するだけでした。『月刊みんぱく』の役割は「友の会」会員を始め、共同研究員や文部省関係の方々に民博の活動を通じて民族学の内容を広く知らしめることがでした。研究者仲間に對しては「民博通信」がありました。『月刊みんぱく』の主たる連載は「みんぱく・えつせい」「館長対談」「みんぱく・コース」「民話の世界」「読者のページQ&A」などでした。梅棹忠夫先生が館長をしておられたころはさまざまな分野の人ひととの「館長対談」が大変興味深いもので楽しんでいたりする読者が多かったようですね。後に中公新書として対談集が数冊出版されました。対談はたいてい吹田にある料亭「柏屋」でおこなわれ、編集長は対談の場に同席して話に合ひの手を入れたり食事のお相伴に預かってきました。「民話の世界」は、田主誠画伯によるシルクスクリーンのページQ&Aなどでした。梅

棹忠夫先生が館長をしておられたころはさまざまなものになっていますが、当時の表紙は今と同じようなカラーを使っていますが、カラー写真がまだ高価だったので、内部の写真は白黒が擬似カラーを使っていました。表紙も初期のものから何回か変わっているようです。

内容も一新されて、ある事柄に焦点を当てた特集的な編集になつていています。それなりにいろいろ工夫がされ

ているようですが、どのような読者を想定しているかによつて効果も異なるものと思われます。最近はテレビや外

国旅行を扱つた雑誌などによつて世界の民族文化が紹介されています。三〇

年前とは世間一般の情報環境がかなり違っています。『月刊みんぱく』の役割

とその表現様式を再考する必要があるのではないか

ではないでしょうか。

最近はカラーもふんだんに使われてきれいなものになっていますが、当時の表紙は今と同じようなカラーを使つたのですが、カラー写真がまだ高価だったので、内部の写真は白黒が擬似カラーを使っていました。表紙も初期のものから何回か変わっているようです。

内容も一新されて、ある事柄に焦点を

当てた特集的な編集になつていています。それなりにいろいろ工夫がされ

ているようですが、どのような読者を

想定しているかによつて効果も異なるものと思われます。最近はテレビや外

国旅行を扱つた雑誌などによつて世界

の民族文化が紹介されています。三〇

年前とは世間一般の情報環境がかなり

違っています。『月刊みんぱく』の役割

とその表現様式を再考する必要がある

ではないでしょうか。

30巻の歴史を回顧する

編集長の役得

中牧弘允

(なかまきひろちか)
本館民族文化研究部

役割と表現様式の再考を

一九八〇年代後半の五年間は『月刊みんぱく』とともに親密なおつきあいをした時期である。そのあいだ、一九八七年四月から一九八九年一一月までは編集長をおおせつかつて、いた。

編集長といつてもそのころは、今どち

がつてだいぶ楽だった。目次構成はほ

とんど変化がなく、館長対談の相手や

「みんぱく・えつせい」の候補者えら

びに多少頭をひねるくらい。色校と称

する最終校正をのぞけば千里文化財

団の編集スタッフにもつぱら実務を

依存していた。

わたしはむしろ編集をとおして体

得することのほうが多かつた。まずは、

わかりやすい、やさしい文章にするだ

けでなく、広報誌として、民博に親近

感をもつてもふう雑誌に仕上げるこ

とに腐心した。編集長はすべての文章

に目をとおすので、それだけ知識や教

養も身についたはずであるが、さだか

ではない。何よりも樂しかったのは館

長対談に同席することだった。対談を

黙つて聞くだけでなく、ときには質問

をしたり、酒をついだりすることも任

得することのほうが多かつた。まずは、

わかりやすい、やさしい文章にするだ

けでなく、広報誌として、民博に親近

感をもつてもふう雑誌に仕上げるこ

とに腐心した。編集長はすべての文章

に目をとおすので、それだけ知識や教

養も身についたはずであるが、さだか

ではない。何よりも樂しかったのは館

長対談に同席することだった。対談を

黙つて聞くだけでなく、ときには質問

をしたり、酒をついだりすることも任

得することのほうが多かつた。まずは、

わかりやすい、やさしい文章にするだ

けでなく、広報誌として、民博に親近

感をもつてもふう雑誌に仕上げるこ

とに腐心した。編集長はすべての文章

に目をとおすので、それだけ知識や教

養も身についたはずであるが、さだか

ではない。何よりも樂しかったのは館

長対談に同席することだった。対談を

黙つて聞くだけでなく、ときには質問

をしたり、酒をついだりすることも任

得することのほうが多かつた。まずは、

わかりやすい、やさしい文章にするだ

けでなく、広報誌として、民博に親近

感をもつてもふう雑誌に仕上げるこ

とに腐心した。編集長はすべての文章

に目をとおすので、それだけ知識や教

養も身についたはずであるが、さだか

ではない。何よりも樂しかったのは館

長対談に同席することだった。対談を

黙つて聞くだけでなく、ときには質問

をしたり、酒をついだりすることも任

得することのほうが多かつた。まずは、

わかりやすい、やさしい文章にするだ

けでなく、広報誌として、民博に親近

感をもつてもふう雑誌に仕上げるこ

とに腐心した。編集長はすべての文章

に目をとおすので、それだけ知識や教

養も身についたはずであるが、さだか

ではない。何よりも樂しかったのは館

長対談に同席することだった。対談を

黙つて聞くだけでなく、ときには質問

をしたり、酒をついだりすることも任

得することのほうが多かつた。まずは、

わかりやすい、やさしい文章にするだ

けでなく、広報誌として、民博に親近

感をもつてもふう雑誌に仕上げるこ

とに腐心した。編集長はすべての文章

に目をとおすので、それだけ知識や教

養も身についたはずであるが、さだか

ではない。何よりも樂しかったのは館

長対談に同席することだった。対談を

黙つて聞くだけでなく、ときには質問

をしたり、酒をついだりすることも任

得することのほうが多かつた。まずは、

わかりやすい、やさしい文章にするだ

けでなく、広報誌として、民博に親近

感をもつてもふう雑誌に仕上げるこ

とに腐心した。編集長はすべての文章

に目をとおすので、それだけ知識や教

養も身についたはずであるが、さだか

ではない。何よりも樂しかったのは館

長対談に同席することだった。対談を

黙つて聞くだけでなく、ときには質問

をしたり、酒をついだりすることも任

得することのほうが多かつた。まずは、

わかりやすい、やさしい文章にするだ

けでなく、広報誌として、民博に親近

感をもつてもふう雑誌に仕上げるこ

とに腐心した。編集長はすべての文章

に目をとおすので、それだけ知識や教

養も身についたはずであるが、さだか

ではない。何よりも樂しかったのは館

長対談に同席することだった。対談を

黙つて聞くだけでなく、ときには質問

をしたり、酒をついだりすることも任

得することのほうが多かつた。まずは、

わかりやすい、やさしい文章にするだ

けでなく、広報誌として、民博に親近

感をもつてもふう雑誌に仕上げるこ

とに腐心した。編集長はすべての文章

に目をとおすので、それだけ知識や教

養も身についたはずであるが、さだか

ではない。何よりも樂しかったのは館

長対談に同席することだった。対談を

黙つて聞くだけでなく、ときには質問

をしたり、酒をついだりすることも任

得することのほうが多かつた。まずは、

わかりやすい、やさしい文章にするだ

けでなく、広報誌として、民博に親近

感をもつてもふう雑誌に仕上げるこ

とに腐心した。編集長はすべての文章

に目をとおすので、それだけ知識や教

養も身についたはずであるが、さだか

ではない。何よりも樂しかったのは館

長対談に同席することだった。対談を

黙つて聞くだけでなく、ときには質問

をしたり、酒をついだりすることも任

得することのほうが多かつた。まずは、

わかりやすい、やさしい文章にするだ

けでなく、広報誌として、民博に親近

感をもつてもふう雑誌に仕上げるこ

とに腐心した。編集長はすべての文章

に目をとおすので、それだけ知識や教

養も身についたはずであるが、さだか

ではない。何よりも樂しかったのは館

長対談に同席することだった。対談を

黙つて聞くだけでなく、ときには質問

をしたり、酒をついだりすることも任

得することのほうが多かつた。まずは、

わかりやすい、やさしい文章にするだ

けでなく、広報誌として、民博に親近

感をもつてもふう雑誌に仕上げるこ

とに腐心した。編集長はすべての文章

に目をとおすので、それだけ知識や教

養も身についたはずであるが、さだか

ではない。何よりも樂しかったのは館

長対談に同席することだった。対談を

黙つて聞くだけでなく、ときには質問

をしたり、酒をついだりすることも任

得することのほうが多かつた。まずは、

わかりやすい、やさしい文章にするだ

けでなく、広報誌として、民博に親近

感をもつてもふう雑誌に仕上げるこ

とに腐心した。編集長はすべての文章

に目をとおすので、それだけ知識や教

養も身についたはずであるが、さだか

ではない。何よりも樂しかったのは館

長対談に同席することだった。対談を

黙つて聞くだけでなく、ときには質問

をしたり、酒をついだりすることも任

得することのほうが多かつた。まずは、

栗本 英世

(くりもと えいせい)
大阪大学教授

よき伝統は保ち、使命をはたす

わたしは、一九九二年四月の民博赴任と同時に、当時の編集長、秋道智彌助教授の「一本釣り」にあって、「月刊みんぱく」編集部に加わることになった。以後八年間、二〇〇〇年春に民博を去るまで編集部に籍を置き、最後の一 年間は、野村雅一編集長を引き継いで、編集長を務めた。当時の編集委員は、「月刊みんぱく」は民博にとって最重要の広報メディアであり、研究から展示にいたるあらゆる情報は、編集部に集中すべきであると考えていた。また、編集部は、たかい自律性をもつており、こうしたことから、編集長をはじめ編集委員の意気は軒昂であり、強い自負心があつたように思う。

新人のわたしにとって、「月刊みんぱく」の仕事は、民博という組織の全貌を知るうえで、そして雑誌の編集という仕事を学ぶうえで、とてもプラスになつた。とくに編集については、校正や割り付けのしかたから、紙面の作りかた、それに作文技術にいたるまで学ぶことができたのは、あり

がたかった。千里文化財団の優秀な編集者のおかげである。また、「月刊みんぱく」編集部で河出書房新社から刊行された三冊の本——「100問100答世界の民族」(一九九六年)、「100問100答 世界の民族生活百科」(一九九九年)、「キーワードで読みとく世界の紛争」(二〇〇三年)——の編集のお手伝いができたことも、よい経験になつた。

編集委員としての最大のよろこびであり、スリルでもあつたのは、「みんぱく・いんたひゅう」の仕事である。

人選と編集には苦労したが、民族学・人類学だけでなく各界の第一線で活躍している人たちとの座談は、まさに「役得」であった。

近年は、広報誌としての「月刊みんぱく」の位置づけも変化していることと思う。編集部OBとしては、変化に対応して、たえず刷新をおこないながら、よき伝統は保持して、本来の使命をはたしていただきたいと願うしだいである。

「月刊みんぱく」は数年前からテーマにこもつとも、教官は出版したいものはすべて民博内部で出せる。そのため、推敲段階で叩かれることがなく、教官の独りよがりがはびこる、という説だ。これらについては、その後幾つかの策を実施してやや改善の兆しが見られると思つ。

いちばん頭が痛かつたのは③だった。草創期には「民博通信」を研究連絡誌、「月刊みんぱく」を「友の会」会員をも対象とする一般的な博物館広報誌、という仕分けがなされていました。それぞれに特

民博を知る編集者との協働を

「月刊みんぱく」は、細身の身体にさまざまな情報をまとつているが、されど肩の凝らない魅力的な広報誌だった。民博の専任教官になる前には、毎月送られてくるたびに、民博の多様な

研究活動や民族学の楽しさなどに惹かれ、必ず目をとおしていた。最初か

ら最後まで一冊の広報誌に目をとお

るのは、忙しい日常ではきわめてめずらしかつた。それが苦にならない楽しさと分量が、この雑誌の魅力のひとつでもあつた。

民博の教官になつてから三年目で

まかされた編集長職は、わたしには重く感じられた。この広報誌のもつ親しみやすい魅力をなんとか継続させた

かつたわたしは、編集方針や機能分担

をあまり変えることなく、わたしなりに工夫をこころみた。とくに、ファイ

ルドワークの楽しさを伝えることに力をそそいだ。

編集長インタビューでは、さまざまなかたちでフィールドワークをおこなつている各界の方々に登場いただいた。南極、アメリカ史、チンパンジー、壺作り、ウミガメ、ピラミッド、気候変

の情報提供に価値があると思う。今後は、民博をよく知り、こよなく愛するプロの編集者との協働が何よりも大切になるだろう。

情報をゆつたり見せる工夫が必要

わたくしもが編集に携わつていて、

た二〇年ほど前に比べて、「月刊みんぱく」はまず紙質が変わつて上等なものになり、その分文字は読みやすく、写真もきれいになりました。とき

が移れば一般にものごとはよい方向

に変わるとすれば、これは半ば

当然のこととして、表紙のデザイン

が大きく変わったのは特筆すべきこ

とでしょう。個人的な印象をいわせ

ていただくと、二〇〇四年四月号以

降の大変化にはとても驚き、一読者

としてひそかに大拍手を送りました。

なるほど編集責任者の意向でものご

とは大きく変わることができるので

と実感したものです。そのときの表

紙写真が、太陽の塔の顔そのものの

アップ写真であつたことも「変革」の

印象を強める力をもつものでした。

やはり表紙は大事ですね。

「月刊みんぱく」は基本的に民博

の動きを伝える情報誌としての役目

をもつてゐるのではありますが、それと

同時に文化人類学(民族学)という学

問領域について、より多くの人びと

ができるでしょう。現在のところ、少

い頁数の冊子に多すぎる情報量とい

う印象があり、全体に少々ゆつたり

した観があつてもいいと思ひます。

発信源としてのさらなる挑戦

役割の再検討

出版委員長を務めていたとき、民博の出版物に関する外部評価をはじめて実施した。出版界で活躍する方々と出版に実績のある研究者にお願いして、出版物の総点検をしていただいた。「月刊みんぱく」は出版委員会の所轄ではなかつたので評価対象ではなかつたが、民博の草創期を知る人が大半だつたため、「月刊みんぱく」も含んだ批判が多く聞かれた。

結論は①民博は自家出版の仕組みが

整いすぎている、②外部の編集者が目を

とおす世界へもつと積極的に出てゆくべき、③館全体としての広報戦略が見えないの三点に集約される。①と②はまことにじもつとも、教官は出版したいものはすべて民博内部で出せる。そのため、推敲段階で叩かれることがなく、教官の独りよがりがはびこる、という説だ。これらについては、その後幾つかの策を実施してやや改善の兆しが見られると思つ。

いちばん頭が痛かつたのは③だった。

草創期には「民博通信」を研究連絡誌、「月刊みんぱく」を「友の会」会員をも対象とする一般的な博物館広報誌、という仕分けがなされていました。それぞれに特

を定めて特色のある方を対談の相手に

選んだり、特集を組んだりしているが、

くなつてきただよに感じる。評価委員たちはこの流れを敏感に察知しており、一

たところから研究広報誌としての傾向は強

くなり、読み応えがある代わりに、重く堅

い評価がよく聞かれた。

全体の広報誌とせよとの意見も出していた。

『月刊みんぱく』は数年前からテーマ

を定めて特色のある方を対談の相手に

選んだり、特集を組んだりしているが、